

# マイノリティ表象をめぐる知識社会的アプローチ —アーティキュレーション概念の再検討—

新嶋 良恵<sup>1</sup>

Yoshie Nijjima

<sup>1</sup>慶應義塾大学大学院社会学研究科 Keio Graduate School of Human Relations

**要旨**…新保守主義イデオロギーの作用と、メディアによる人々の周縁化は、アーティキュレーション (articulation) 概念を軸としたスチュアート・ホールによる言説分析により鮮やかに描かれた。ホールは、そうした「現実」の構成過程を暴くことで、イデオロギー機能に批判的な視点を提供した。しかし、アメリカで広がったマイノリティ表象研究は、エスニック・マイノリティをめぐる表象が、どのようにして常識として共有され、人々を分節化し、差異化する枠組みとして維持され続けるのか、という問いに十分には答えてこなかった。それは、メディア表象、イデオロギー、常識、等々といった言説空間の諸事象をつなぐ視点の導入が不十分であったことにある。そこで、本研究において、現実の社会的構成論で議論された、「知識の循環」過程を観察するアプローチを、権力が展開される「場」としてのマス・メディア空間に関する分析—すなわち言説分析—に導入することによって、人々の周縁化というイデオロギーの作用がさらに明確な形で描かれ得るということを示す。ヘゲモニー闘争の中でのアイデンティティの創出、変化または再生産を描き出すにはどういった分析枠組みが有効なのであろうか。そうした問いの延長においてマイノリティ表象の問題をとらえるとき、表象と社会的地位、そしてアイデンティティという相互の関係は見通しの良いものとなる。

**キーワード** 言説分析 知識社会学 アーティキュレーション エスニシティ マイノリティ表象

## はじめに

従来の、マイノリティをめぐるメディア表象<sup>1</sup>の分析というものは、差別の暴露に重点を置いてきた。マイノリティが日常で出会う差別について記述していくことは意義深いことだが、差別される主体がいかにして劣位として表象されていくのか、そうした表象がなぜ受け入れられるのかなど、社会的背景に注目する研究は少ない。これは、マイノリティに対する表象を対象とした研究が、マイノリティ自身によって、自分たちの地位向上のための社会運動の一環として行われていることがその一つの要因だとされている<sup>2</sup>。

マイノリティ表象の維持・再生産はいかようにして行われているのか。なぜ特定の表象が「常識」的なものとして、受け入れられるのか。そうした問いは、カルチュラル・スタディーズの代表的理論家であり、批判的コミュニケーション研究に指針を提供したスチュアート・ホールが経験的分析の中で明らかにしようとしたものである。しかし、アメリカにおけるマイノリティ表象研究は、カルチュラル・スタディーズの意図を十分に摂取しないまま広がっていった。アメリカで受容されていく中で、メディアによる表象と、マイノリティの「真の姿」の間に存在する差異を指摘したり、抵抗する主体としてマイノリティを奨励するという方向に、カルチュラル・スタディーズは収斂していった。

マイノリティをめぐる研究としては、エスニック・スタディーズ<sup>3</sup>という領域も盛んである。1960年代の流れの中で、エスニ

<sup>1</sup> 本研究では、対象を描写する言表や、言表と対象との結びつきから想起される一連のイメージを「表象」としている。

<sup>2</sup> 特に、アメリカにおけるエスニック・マイノリティを対象とした研究に対してそうした批判が行われている。

<sup>3</sup> エスニック・スタディーズとは60年代末に活発化した「同化論的 (melting-pot) なエスニシティ解釈に対し、人種マイノリティによる『民族自決 self-determination』と『第三世界の被抑圧民族としての連帯』を掲げた『エスニック・スタディーズ』運動から生まれたもの…人種マイノリティの歴史や同時代的状況を『エスニック』な経験として解釈する枠組が定着し、多元的なアメリカ社会像の構築に大きな影響を与えた」とされ

ック・スタディーズという動きが生まれ、アメリカ社会学の一分野として興隆した。エスニック・スタディーズはその始まりからも理解されるように、ホールの、表象と主体の結びつき潜む権力の作用を暴露するという解放の思想と共鳴するものであった。特に、「知識人による言説」がメディアの媒介により広まり、知識として共有され、受容されていくという過程、すなわち、メディア空間におけるヘゲモニーの獲得の過程についての注目においては、理論的に十分に接近する可能性があると考えられる。移民の歴史、社会学や人類学など学問などの移り変わりを見ると、専門分野の知識人による言説が社会で大きな影響力を持つことは少なからずあった。しかしエスニック・スタディーズにおいて、こうした点に注目するエスニック表象研究は限られているのが現状である。

本研究では、ホールのアーティキュレーション概念と、「現実」が相互承認によって形成・維持される点を強調するPLPバーガーの現象学的知識社会学における共通の問題意識をあらためて確認にする。この試みは、ある言説を自らの言説に結び付け世論を勝ち取ろうとするその過程を観察可能とする枠組みの提示を目指すものである。

## 1. スチュアート・ホールの問題意識

言語論的展開を受け、人文科学が、言語・言説の「力」「効力」に注意を向けるようになった。これらの研究の特徴として、「現実の構築」と「権力」に注目するという2点があげられる。現実の構築への注目とは、言語・言説を指示対象（現実）をありのままに再現する道具とみなす言語観を拒絶し、むしろ現実を作り出していくという能動的作用に着目すること。「権力」への注目とは、言語そのものが持つ権力のあり方に着目するもので、ジェンダーやエスニシティをめぐる事実確認的な言明（ex.優生学）が、社会的な権力関係の再生産に寄与してきたことは多く指摘されている。

ホールのマイノリティ表象分析の中で特筆されるべきは、なぜ特定の表象が「常識」的なものとして、自然なものとして、受け入れられるのか、という問いをイデオロギーの作用として注目した点であろう。マス・メディアを介して為される表象をめぐる力関係の解明を、主たる分析の目的に据えるというホールの企図<sup>4</sup>は、マス・メディア空間を「闘争と場」として見据えた、自身の、マイノリティ集団に対するマス・メディア表象の言説分析に見ることができる。マイノリティ表象を担うマス・メディアを研究する際、表象と常に照応される形で生成されるという「社会的な主体」としてのマイノリティの姿について描き出すと視座の重要性は認識されることだろう。こうした視座は、アメリカにおけるエスニック・マイノリティを研究するうえで、より、社会により構築される「マイノリティ表象」という点について迫るものであり、ホールが使用した言説分析という手法はこうした分野こそ摂取していく意義があるといえよう<sup>5</sup>。

ホールの言説分析は、認識に対する言葉の権力性に強い関心を持つものであった。特にそれは、言葉の組み合わせを決定すること（言説の編成）が認識に対して及ぼす影響への関心であったといえよう。論文「<イデオロギー>とはなにか」<sup>6</sup>の中で、「実は意味づけとは、或る用語の組み合わせのなかで特定の用語の位置を決めることなのである。それぞれの用語の位置づけは、その用語が含まれる分類図式の中で占める適切な差異を明らかにする」と述べている<sup>7</sup>。そして、マス・メディアの場とは意味やアイデンティティをめぐる戦場であり、表象の意味づけをめぐる様々な勢力が権力闘争を繰り広げる場である。その場において、またそうして意味づけが決定したマス・メディア表象との照応関係において、人々のアイデンティティというものは構成されるという点をここで強調しておきたい。用語を扱うマス・メディア、すなわち人々に言葉を与え、人々を描写する表象を付与するマス・メディアは、「意味づけ」を担うという点において強い権力性を有すると考えられる。このように、カルチュラル・スタディーズは、旧来の権力分析ではとらえきれない文化における権力の作用—特に表象を分析の対象とすることで文化をめぐる力関係—を把握しようという志向性を持つとされる<sup>8</sup>。

ている（南川 第51回関東社会学会報告）。

<sup>4</sup> 「マギング」の研究など（Hall 1978）日本では山腰（2004、2012）などがホールを批判的コミュニケーションの文脈から再評価している。

<sup>5</sup> しかし、カルチュラル・スタディーズはホール自身が批判するように、その理論的志向性を十分にくみ取ってはこなかった。テキストの状況定義と意味解釈をめぐる闘争過程の分析するための「エンコーディング・デコーディング・モデル」というスチュアート・ホールが提唱したメディア分析の理論枠組みは、カルチュラル・スタディーズが企図するようなテキストの外部にある諸局面を捉えるものとなる可能性があったが、実際には受け手の主体性を無視し、テキストによる決定性を導くような研究へと移行してしまった（岡井 2004）。

<sup>6</sup> Hall(1986)

<sup>7</sup> ibid. 218

<sup>8</sup> 批判的言説分析は政治コミュニケーション研究における新たな分析戦略を目指すうえできわめて有効であるといえる。その一方でフェアクラフのアプローチは、ヘゲモニックな言説編成を可能にする条件や枠組みについては明示していないなど、政治コミュニケーション機能の解明について特別の関心を払ってこなかったと山腰は指摘している（2012）。

しかしながら先に述べたように、そうした志向性は、十分に理解されることはなく、マイノリティの能動性を称揚するという表層的な形での受容にとどまった<sup>9</sup>。まずは、アーティキュレーション過程をさらに理解するために、マイノリティ表象とイデオロギーの関係について考察することから始めたい。

## 2. アーティキュレーション

ホールの「アーティキュレーション」の概念は、エルネスト・ラクラウやジャンタル・ムフらによって既にその輪郭が与えられていた<sup>10</sup>。ラクラウはジャンタル・ムフとともに、言説分析に「アーティキュレーション」概念を新たに導入した研究者である。この「アーティキュレーション」という語には、断片を有機的に接合するという意味と、他と分節するという意味のどちらも含まれている。また、接合と分節を通して「意味を明らかにする」「表明する」という意味もある<sup>11</sup>。

ラクラウはこのアーティキュレーション概念を、言説理論の視点から発展させ、個々では無関係であった諸要素が連結されることにより意味を持ち、イデオロギーの統一性を支えていると主張した。

ラクラウらの言う「アーティキュレーションの実践」とは、言説の場において意味が過剰に産出され、そのため意味の同一性（アイデンティティ）が絶えず変化していきながら、「部分的に固定化」されるという過程、すなわち部分的に固定化された意味の「結節点」の構築こそがアーティキュレーションの実践であるとしている。このアーティキュレーション概念の持つ実践的な側面を強調することで、言説編成をさらに不確定で絶えず変化するものとして捉えられるとされる。そして、敵対しあう社会的勢力は、ある言説を自らの言説に結び付け世論を勝ち取るようとする<sup>12</sup>。

ホールは、アーティキュレーション概念を、コミュニケーション研究に導入した。しかし、先にあげたような、社会構造と、政治的方向づけと、マイノリティ表象という、3つの相互に作用しあう関係を描いたホールによる新保守主義政権下における新聞の言説分析は、その重要性が、後のアメリカにおけるマイノリティをめぐる表象分析に十分に摂取されたとは言い難い。それは、ホールによるこうしたアーティキュレーションのもたらすイデオロギー的な側面についての理解が深まらなかったことに原因があると考えられる。マイノリティをめぐる表象の創出により、マイノリティの社会的地位が規定されていくという、イデオロギーの作用としてのアイデンティティ構築過程を画く際、有効な視座を提供したにもかかわらず、アメリカにおけるカルチュラル・スタディーズはポストモダン志向の影響を受けた、「戯れ」としての表象研究へと収斂していった<sup>13</sup>

以下において、ホールが、マイノリティ表象の言説分析の中で示した、アーティキュレーションの意味作用についてみていく。

### (1) アーティキュレーションによるアイデンティティの構成

アーティキュレーションのもたらす3つの意味作用

- ① 相互に無関係である諸要素の意味的な連結により成立するイデオロギーの統一性
- ② アイデンティティの構成
- ③ 敵対関係の構成<sup>14</sup>

このように、アーティキュレーション概念は、ヘゲモニー闘争の中でのアイデンティティの創出を描き出す際に必要となる新たな分析枠組みの構築を目指したものであった。それは、節合による統一性の確立（ex. 新保守主義体制下におけるヘゲモニー）と、節合によるアイデンティティの創出という、2つの次元で行われる「アーティキュレーションの実践」を捉える分析枠組み

---

.....「意味づけをめぐる政治」の展開過程の中で生じる固有の意味構築のされ方、それらが生じる契機や条件、その結果としての政治的な効果や影響である。さらにはそうした一連の過程とヘゲモニー政治との関連性についても明らかにしてこなかった。

(中略)ホールが論じたように、「意味づけをめぐる政治」がヘゲモニー政治を対象とするならば、言説分析は政治社会の組織化や秩序化、そしてその過程で生じる権力闘争といった政治諸過程とかわりながら機能する意味作用を明らかにする必要がある(山腰2012:86)。

<sup>9</sup> この点については拙著、「マス・メディア表象研究におけるカルチュラル・スタディーズの意義—スチュアート・ホールの文化的アイデンティティ理論をてがかりに」(2014)を参照のこと。

<sup>10</sup> 栗谷(1997)

<sup>11</sup> 佐藤(2010)p.115

<sup>12</sup> Laclau(1977)

<sup>13</sup> 一方イギリスでは、経験的調査を行い、メディアの受容に関するホールの理論的仮説を裏付けようとするモーレイなどが、メディアを通じた空間の編成の問題を取り上げる理由として、不可視化されてきた境界線確定の権力作用をあげている。すなわち「われわれ/彼ら」など、区分けすることの権力性(二項対立図式における前者の優位性)を暴き、問題化する目的で、空間の再編成を研究主題として取り上げる(Morley 2000=2007)。

<sup>14</sup> ラクラウとムフは、この点について、農奴の存在自体に敵対性があるのではなく、平等や人権などの概念を中心とする言説空間におかれたときに、はじめて(雇用主との)敵対関係として構成されるとしている(198)。

の構築を目指すものである。彼は、新聞など当時のメディアによるマイノリティの表象詳細に分析して、ネガティブな言表とマイノリティグループが節合されて、黒人全体に対するステレオタイプ的なイメージが創出されていったこと、またその結果が実際の政策にどのような影響をもたらしたかについて議論した。例えば、「マギング」<sup>15</sup>では、1972年ごろから黒人少年による「マギング（ひったくり行為）」が多発したという報道について調査した。統計的には少なからぬ白人の少年も、マギングという犯罪行為を行っていたのにもかかわらず、それは、黒人地区特有の犯罪で、被害者は決まって白人の女性や老人であるかのように報道では伝えられたという。そうした報道により、イギリス社会を脅かす脅威としての、黒人イメージが創り出され、実際の政策に影響を与えたと考察した。ホールは「マギング」という語と、黒人の若者が結び付けられ、イギリス社会における周縁の存在としての黒人イメージが創られていった過程を、言説分析を通して描いた。

このような検証により、①のイデオロギーの統一性は、②と③という意味作用を持って行われることが明らかとなった。なぜ言葉と特定グループの意味的な連結がイデオロギー的なのかというと、それは、そうした読みを自然なものとして受け入れさせる、力学にあるという。これは、新保守主義体制下でのマイノリティのアイデンティティの構成と、敵対関係の構成によるイデオロギーの統一性作用を描き出したものでもあった。

## (2) 支配的イデオロギー

メディア空間は、多元的現実が現れる可能性の場である。しかしその中で、優位的な現実の見方、すなわちより正当性を持つとして特定の「読み」が採用されていく場合がある。それはすなわち、イデオロギーの問題として議論しておくべき問題となる。

権力が展開される「場」としてのマス・メディアとは、「敵対しあう社会的勢力はある言説を自らの言説に結び付け世論を勝ち取る」というラクラの議論<sup>16</sup>に基づいてホールが提起したものである。ホールの「エンコーディング／デコーディング」モデルは、メディア・オーディエンスを能動的なメッセージの「読み手」とし、支配的イデオロギーに対する対抗的な主体として位置付けるカルチュラル・スタディーズのコミュニケーション論として受容されてきた<sup>17</sup>。しかしその能動的な読みの中にもマイノリティの読みとマジョリティの読みがあり、その読みは多様でありながら権力構造からは完全に自由ではありえない。そこで、ホールは、ある言説が優先的に採用され、他の「読み」を退け、世論を勝ち取っていく過程を分析し、その節合のされ方を暴露していくことで、イデオロギー的な力（force）を明らかにしようとした。イデオロギー的力の場というのは単純に「多元的」なだけでなく、そこには劣位のレジームや劣位に置かれる主体が存在し、その関係が真実を成り立たせているのである<sup>18</sup>。そうした中で、解放の道を模索するのが、ホールが意図したところである。ホールは、アーティキュレーションにより構成されたアイデンティティや、敵対関係がいかんにして自然な常識として共有されるのかという問いが、イデオロギーがいかんにして支配的な地位を獲得するのかという問いにつながっていくと言及していた。

*意味の循環問題は却座に権力の問題を想起させる。誰が権力を持つのか、どのような経路で、どの意味がだれに向けて循環されるのか。以上のようなことが、表象の問題から、権力の問題をかつこ付で取り外すことはできないのだ<sup>19</sup>*

ここでいう、「意味」とはマイノリティの表象による、アイデンティティの構成や、敵対関係の創出であり、それはメディアを介した循環機能により、マイノリティをめぐる「知識」として人々に共有される。こうした過程を描き出す分析手法として、アーティキュレーション概念を基軸とする言説分析は有効である。しかし、スチュアート・ホールが批判するように、メディア表象研究は、本来のカルチュラル・スタディーズの理論的志向性を十分に継承してこなかった。そして、エスニック・スタディーズも、マイノリティと表象をめぐるイデオロギーの作用について本質的に迫り切れてはいない。

ここで一つ指摘しておきたいのは、ホールの研究では、敵対関係の線引きが時間の経過とともにさまざまに変化することは、考察されていなかった点である。表象の内容変化について注意を払わなければ、表象と劣位のレジームの関係、特にアメリカにおける多人種・多エスニックな社会におけるマイノリティの闘争について描ききれないことを問題化しておかなければならない。

そこで次節では、アーティキュレーション概念に視座を置いた分析と、「現実の社会的構成」に代表される現象学的知識社会

<sup>15</sup> Hall 他 (1978)

<sup>16</sup> Laclau (1977)

<sup>17</sup> Morley (1992)、Fiske (1987=1996)、藤田 (1988)

<sup>18</sup> Hall (1989) p135

<sup>19</sup> Hall (1997) p14 翻訳は発表者によるもの。

学との親和性を指摘し、こうした問題に対する、知識社会学的アプローチの現代的な応用可能性について検討する。

### 3. 知識社会学の視点

現象学的知識社会学の視点によると、われわれが「現実」だと考えているものは、われわれがそれについてもっている常識的な知識に支えられており、この「知識」にもとづいて営んでいる相互作用を通して「現実」として構成され、維持されているという (ex. バーガー「現実の構成」論)。ルックマンとの共著の中でバーガーは、そうした現実が世論を勝ち取る過程に目を向けることの重要性について説いている。

*自ら知識社会学と名のる学問は、さらに人間社会において「現実」が「既知」のものとして受け容れられるときの一般的な様式をも研究対象とする必要があるだろう。換言すれば、「知識社会学」は人間社会における、「知識」の経験的な多様性を研究対象としなければならないだけでなく、いかなる「知識」体系であれ、それが「現実」として社会的に確立されるに至る過程をも問題にしなければならない、ということである<sup>20</sup>。*

専門的知識の一般的共有について、メディア報道を検証していくことの必要性は、この点において確認される。メディア空間の中で、ある特定の専門的知識が優位性を獲得し、支配的な「読み」となるのは、既知のとおり、その時代、状況におけるイデオロギーの働きによるところが大きい。それは、ホールが示したとおりである。これは、すなわち、バーガーの言葉を借りれば、「<現実>と<知識>の特定の集合体は、特定の社会的文脈と関係をもって(いる)」ということの現れであり、これらの関係は、こうした文脈の適切な社会学的分析の対象に含まれなければならない<sup>21</sup>。

マイノリティをめぐるメディア表象は、(マイノリティ側の抵抗にもかかわらず)「常識」とされ、普及し、維持され続けてきた。このような常識は、共有され、時に公的な場でも使われる (ex. 人種・エスニシティの表記)。「常識としての表象」がいかんして、アイデンティティを構成し、敵対関係を作り出すことで、既存の「現実」社会を支えているのか、それこそがマイノリティをめぐる表象研究が明らかとすべき課題である。

ある表象が「常識」として受け入れられるには、それを自然とするイデオロギーの浸透が不可欠であり、メディア言説がそうした常識の自然化を促すことはスチュアート・ホールが示したとおりである。本節で確認した知識社会学の視点が、そうしたイデオロギーを背景とした表象の自然化という視点に加えて、アイデンティティ表象が変化するという意味や、その期待される作用について、論を展開する一助となれば幸いである。方法論として、このような視点から行う言説分析は、分析対象が表象の生成とともに創造されていった経緯を社会的な動向とともに描き出す際に有効な手法になり得ると考えられる。それは、新保守主義という新たな資本主義の形態の登場など、イデオロギーの変化の結果として、そしてそれを支える要素として、アイデンティティの表象がメディア言説の中で行われていることを観察可能にする。

### 7. おわりに

本研究では、マス・メディアによるマイノリティ表象、イデオロギー、常識、等々といった言説空間の諸事象をつなぐ、理論的展開の試みとして、現実の社会的構成という現象学的知識社会学を言説分析に取り入れることを検討した。具体的には、社会の「常識」がメディアを媒介として普及していく過程を、「マイノリティ表象」を素材として分析することの有効性について議論した。P. L. バーガーは、社会の「常識」が普及していく過程を分析することこそが、知識社会学の主題であるべきだと論じた。こうした分析は、社会秩序の維持や再生産という壁を越えて、主体側は変革をもたらさうのか、という問いに迫る下準備だといえる。

表象が創り出される背景、そしてその共有のされ方に目を向けるスチュアート・ホールは、言葉と意味を結ぶアーティキュレーションの作為性を暴露して、そのイデオロギー的作用<sup>22</sup>を弱めようとした。両者は、表象を通じて集団の社会的地位が決定さ

<sup>20</sup> バーガー「日常世界の構成」pp4-5

<sup>21</sup> この点こそが、「日常世界の構成」の主題ともいえる。

<sup>22</sup> ここで確認しておきたいのが、ホールが特に「イデオロギー作用 (ideologica effect)」という表現を使う点である。インタビュー『ポストモダンとアーティキュレーションに関して』の中で、ホールは、知識におけるテキストと権力の相互補完的な関係を、権力が構築する過程として捉えることの必要性を主張している。その過程に「イデオロギー」という語をはめるかどうかについては重要なことではないとしている。重要なのは、その過程がいかなるものかという内容であり、ともかくそれは、相対的な権力と真実の分配の問題に関わるものである。この「イデオロギー作用」は、既存の社会秩序の中での権力の維持に寄与する (Hall 1986, p51)。

れることのイデオロギー性に着目し、そうした状況の中での多元性の担保を模索していた。バーガーは、彼の現代社会論において、社会の多層化・多元化を指摘している。現代人はこのような、多元化したもろもろの社会的な生活世界を遍歴していくとされる。すなわちこれは、個人が、いくつもの社会集団ないし文化集団に属することを意味して、それゆえに個人が内在化する現実定義の形式は一通りではないことを意味している。本発表で、言説分析に取り入れることの有効性を議論した「現実の社会的構成」論は、以上のような彼の現代社会論と合わせて読み解くことで、多元的な現実が、他者との相互関係により立ち現れるという、人間の側からの社会創出を示す能動的な主体化の契機がうかがえる。

今後は、帰属意識の多元的な側面とローカルなものとの対抗政治についてのホルルの議論と合わせて、集団的アイデンティティと個人的アイデンティティについて、「マイノリティ表象」を素材として分析することについて考えていきたい。

## 参考文献

- (1) 粟谷佳司(1997)「アーティキュレーションに関するノート」<<http://www.geocities.jp/ysawat/text/text1.html>>. アクセス日 2014.1.15.
- (2) P.L. Berger. (1963) *Invitation to Sociology*, Garden City, NY: Doubleday. (『社会学への招待』訳 水野節夫、村山研一、2002)  
——— and T. Luckmann, (1966) *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. Garden City, New York: Anchor Books (『日常世界の構成——アイデンティティと社会の弁証法』山口節郎訳、新曜社、1977)
- (3) Fairclough, Norman.(2001), *Language and Power*, 2<sup>nd</sup> edition, Harlow. Longman. (『言語とパワー』, 吉村昭市, 脇田博文, 水野真木子, 貫井孝典 訳, 大阪教育図書, 2008)
- (4) フーコー、ミシェル(1979)『知の考古学』訳中村雄二郎 河出書房新社
- (5) Hall, S. (1978): *Policing the Crisis: Mugging, the State, and Order*. Palgrave Macmillan.  
———(1986): "On postmodernism and articulation: An Interview with Stuart Hall" *Journal of Communication Inquiry*, 10(2), pp45-60. Ed. Grossberg, Lawrence *Stuart Hall Critical Dialogues in Cultural Studies* Ed.Morley, David,Chen, Kuan-Hsing. Routledge, New York. pp131-150  
———(1989)"The Meaning of New Times," *New Times* (スチュアート・ホール「『新時代』の意味」『現代思想スチュアート・ホール』、訳葛西弘隆、青土社、pp66-79, 1998)  
———(1997): "Representation, Meaning and Language." *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*. Ed. Hall. London: Sage, pp12-74.  
———(2010): ed. Jhally, Sut. "Lecture by Stuart Hall Representation & the Media"
- (6) Laclau, E., (1977): *Politics and Ideology in Marxist Theory: Capitalism, Fascism, Populism*, (エルネスト・ラウラウ『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』横越英一監訳、拓殖書房、1985)
- (7) Morley, D. (1992): *Television, audiences & cultural studies*, London & New York, Routledge  
———(2000): *Home Territories*, Routledge.
- (8) 南川文理 (2003)「エスニック・スタディーズ」の誕生：アメリカにおけるエスニシティ理論の歴史的文脈 関東社会学会第 51 回大<[http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points\\_section12.html](http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points_section12.html)>
- (9) 佐藤成基 (2010):「文化社会学の課題：社会の文化理論に向けて」『社会志林』 56(4), pp.93-126, 法政大学社会学部学会.
- (10) Slack, D. Jennifer. (2005): "Hope for the Future: Cultural Studies in the Enclave." *The Communication Review* 8:4, pp393-404.
- (11) Shohat, Ella and Robert Stam. (1994): *Unthinking Eurocentrism and the Media*, London: Routledge.  
———(2008): "Stereotype, Representation and the Question of the Real: Some Methodological Proposals." Paper presented at the 12th Kyoto University Symposium Transforming Racial Images: Analyses from Representation. Dec 5th, 2008 at Kyoto University..
- (12) 山腰修三 (2004):「カルチュラル・スタディーズにおける批判的コミュニケーション論の再構成—スチュアート・ホルルの視座転換を手掛かりにして」マス・コミュニケーション研究 No.64 .  
———(2012):『コミュニケーションの政治学：メディア言説・ヘゲモニー・民主主義』ミネルヴァ書房.
- (13) 吉田幸治(2002):「P.L.バーガー「現実の社会的構成」論における問題性と可能性」、『立命館産業社論集』第37巻第4号 pp195-219.  
———(2004)「P.L.バーガーのアイデンティティ論について」『立命館産業社論集』第39巻第4号, pp23-47.